

採卵当日の採精について

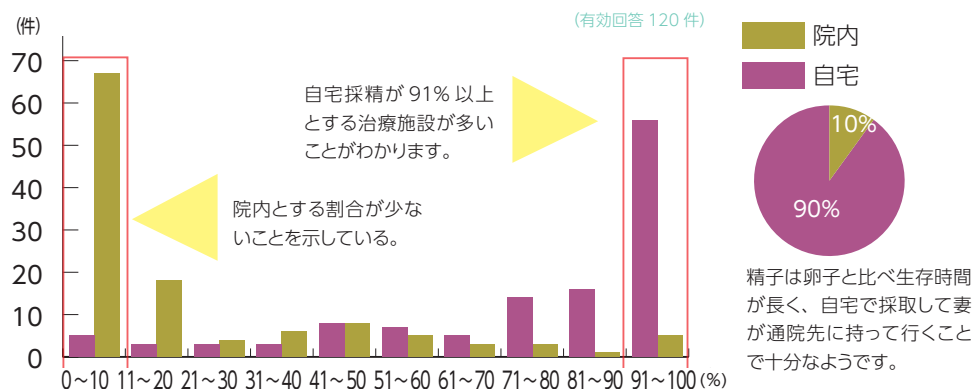
不妊治療には、男性側の精子が大きく関係してきます。特に体外受精には、採卵に合わせ、パートナーの採精が必要です。採精場所としては、自宅採精と院内採精があり、どちらが多いのか、また、男性不妊症での精子回収の実施状況を調べました。

3-1

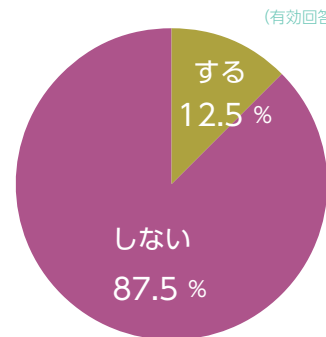
採精場所

半数以上の ART 施設が9割以上の割合で自宅採精をしていることがわかります。夫婦の都合を考慮しても自宅での採精メリットが大きいことがわかります。ただ、自宅採精が多ければ、通院先までの運搬時の注意も気になります。一般的には病院で渡される容器に採精してタオルなどの布で包んで運んでいるようです。オリジナル容器も望まれるところでしょう。

採精する場所は自宅、それとも病院？



採卵当日の採精は院内を推奨している？



採卵当日の採精は、検査のためではなく受精するためになります。そのため採精もよりフレッシュなものと考えて院内採精を勧めている治療施設もありますが、自宅採精でも温度変化に気をつければ十分な鮮度を保つこともでき、問題ありません。また新型コロナウイルス感染症の影響もあり院内よりも自宅での採精を勧める傾向があるようです。

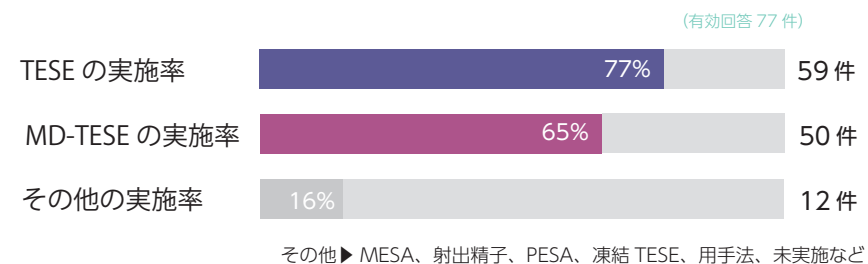
グラフ 3-1 採精場所

3-2

精子回収術として実施しているもの

不妊原因の半分は男性にあります。精液検査などさまざまな検査から男性不妊と診断され、特別な精子回収術を必要とするケースもあります。その手術として TESE や MD-TESE は重要なものですが、全ての ART 施設が実施しているわけではありません。それら実施状況では、回答 77 施設中、77% (59 件) で TESE を実施、65% (50 件) が MD-TESE を実施していることがわかりました。16% (12 件) のその他には、MESA、PESA、凍結 TESE などがありません。

男性不妊症の対応（精子回収術）で実施しているのは？



グラフ 3-2 精子回収術として実施しているもの

3-3

精子回収術の実施場所

回収場所としては、103 回答中、自院が 32% (33 件)、連携施設が 60% (62 件)、8% (8 件) が両方との結果でした。

精子回収術の実施場所は自院、それとも連携先？

(有効回答 103 件)

自院 32% (33 件) 両方 8% (8 件) 連携先 60% (62 件)

TESE や MD-TESE などの精子回収術を連携先で行った場合、採取された組織を培養液内で細かく切り、その中から精子を探して、用いた培養液ごと凍結して自院へ運びます。遠方の場合は、患者さんが運んだり、業者に委託したりしますが、連携先

が近い場合は、自院の胚培養士が連携先で組織を扱い、凍結することもあるようです。自院と連携先の両方で行っている治療施設は、MD-TESE を連携先に委託しているケースが多いようです。

グラフ 3-3 精子回収術の実施場所